

『学校だよりに思う 1.2 』

当町の小学校に赴任後まもなく、教頭先生から学校だより巻頭言の依頼を受けました。「ちなみに、紙面サイズは？」と訊ねると、「A3横の両面印刷です」と即答。私は驚き、思わず「A3横の両面?!」とおうむ返ししてしまいました。すると教頭先生が「当町は、それが標準です」とまた即答。「教頭先生、大変だね。ご苦労様です」この会話のシーンが、当時の教頭先生との会話で強く印象に残っているものベスト3に入っています。

なぜ、それほどまでに驚いたのか。理由は、私の教頭時代（3校経験）は、B4横の片面印刷が標準で、当管内勤務1校目の小学校でもA4縦の両面印刷だったからです。A3横両面は、私にとっては有り得ないボリュームでした。さぞかし、教頭先生は、紙面づくりで苦労されているのだらうと推察しました。

その当町標準サイズが、学校の働き方改革の進展とともに変わりつつあります。まだ全ての学校が変更したわけではありませんが、一部、A4縦両面印刷に切り替わっています。「教頭職は激務」と言われているだけに、このことで少しでも時間や気持ちの余裕が生まれて、本務である学校運営に注力することができるのならいいのではないかと考えております。ただ、紙面が小さくなったことで、逆に、記事の精査や、伝え方の工夫が求められてくるのだらうと想像します。

さて、以下は、本コラム232号の再掲です。学校だよりにまつわる私の思い出話と巻頭言に対する思いです。

私が、教頭に昇任した時に、真っ先に思ったことが「学校だより、大丈夫だろうか・・・」でした。なぜか？ 仕事で使う機器がまだ「ワープロ」だったからです（平成15年頃のこと）。一応パソコンは、「そろそろ用意しておかないとなあ」という意識で購入しましたが、操作に慣れるまでの時間が惜しくて、また、これまでのデータが活用できるので、ぎりぎりまでワープロに頼り切っていました。「少しでも、パソコンに慣れておくべきだった」と大変後悔しました。

赴任前の引継ぎで、「学校だよりは、ほとんど私が作っていました。校長先生が巻頭言を書かれるのは、年に4回くらいかな」と。「えー！巻頭言まで教頭が書くのですか？」と慌てふためきました。「まいったな。パソコンでお便りを作成するのも初めてなのに。巻頭言まで・・・」

救いは、前任者が作成した学校だよりのデータでした。そこに、上書きする形でどうにかこうにか作りました。写真の貼り付けも初めてやりました。やってみて「パソコンって便利なものだな」とは感じました。校長先生の点検後、印刷された私が初めて手掛けた学校だより（B4版表のみ）を見て、ささやかな達成感を覚えたものです。

教頭として3校勤務しましたが、学校だよりの巻頭言を全て書かれた校長先生はいませんでした。どうも他の学校でも、そのような様子でした。「なぜ？」とは思いましたが、そういう慣例になっているのか、はたまた教頭の文章力向上のためのご配慮なのか・・・。

学校だよりは、教育活動の状況をわかりやすく保護者や地域の方にお伝える大事な機能を有しています。とりわけ、巻頭言は「学校としての考え」を伝える文章になりますので、やはり校長が書くべきです。この点では、当町のみならず当管内の小中学校はどれも校長が書いており、

筋を通しているなと感じています。

さて、前号でも触れましたが、私の校長のスタートは年度途中の11月16日からでした。早々に、教頭先生から「校長先生、11月の学校だよりの巻頭言をお願いします」と依頼されました。正直「まいったな」と思いました。何を書けばいいのか？前任者の事情もあり、今度の校長はどんなやつだと注目されているだろうし・・・（私だけがそう思っていただけだったのかもしれませんが・・・）。「第一印象、大事だよな」などと、あれこれ考えてしまいました。

悩んだ末に、自分が見たこと聞いたことから感じたことを素直に書くことにしました。巻頭言のタイトルは今でもすぐ出てきます。「どうぞよろしくお願いいたします」です。

赴任後まもなく、教頭先生の案内で校区内39戸全てを訪問し、着任の挨拶回りをしました。山の中にあり、皆さん、稲作、酪農、畜産、養鶏、養豚などを生業とされていました。当然のことながら、広大な土地の中に家がありますので、次の家までかなり離れていました。挨拶回りに2時間半かかりました。

初めての巻頭言には、この挨拶回りで感じたことを書きました。まずは、お会いした皆様から丁寧で温かな言葉がけや励ましをいただき、新参者にとっては本当に有り難く心強い応援を頂いたこと。そして、厳しい自然と向き合って生きる地域の皆様に強い敬意の念を抱いたこと。加えて、着任式で子どもたちに話したことに触れました。何とか書き上げて教頭先生に原稿のデータを手渡すことができた時は、ホッとしました。

そして、私にとって2回目となる、12月の学校だよりが、以後の巻頭言を書くに当たっての構えが作られることになりました。

それは、年の瀬に開催された「団体長会議（地域の各団体の長が参加対象）」でのこと。早目に来られたPTA会長さんと学校評議員も兼ねられている地域の重鎮の方が世間話をされていたのですが、たまたま「何もノーベル賞を取って欲しいわけでもないし、オリンピック選手を出して欲しいわけではない」「そうそう。そういうことではない。俺らが求めているのは・・・」という会話が聞こえてきました。私は、12月学校だよりの巻頭言のことを話されているのだと思いました。

なぜ、そう思ったのか？ 12月号には、少し大きなことを語った覚えがあったからです。たぶん、2回目ということもあり、少し自分の考えを打ち出すことを意識していたと思います。出だしは、北海道出身者がノーベル賞を受賞されたりアジア大会陸上で金メダルを獲得されたりと。そのことが嬉しくかつ誇らしいと。そして、夢や希望を持ち、その実現に挑戦することの大切さを教えられたと。さらに、「はやぶさ初号機の地球帰還」に触れ、「あくなき挑戦心」や「絶対にあきらめない強い気持ちを持つこと」を学んだこと。

直接、問うたわけではありませんが、「もっと足もとを見なさい。日常の身近なところから感じ取ったことを校長の言葉で書きなさい」と言われた気がしました。お二人が、私に聞こえるように意識して話されていたのかどうかはわかりません。でも、私は、「イエローカード」を出されたと受け止めました。「これは、まずい！」と内心は狼狽していました。

次号の1月学校だよりの巻頭言は、後はないものと心してかかりました。自分は、このひと月、何を見たのか、何を聞いたのか、そこから何を感じ取ったのか。そして、何を伝えたいのか。必死で考えました。結果、前回の反省が活かされた文章がなんとか書けたのではと思っています。

さて、以降、書き続けていく中で、学校だより巻頭言に対する自分なりのこだわり（流儀と云えればかっこいいのですが、そこまでではないので）が作られていきました。

① まずは良いと感じた子どもの姿に触れる。② 題材は身近なところから見つける（世の中で

大きく取り上げられていることは避ける→見解がすでに出ており受け売りになりがちのため)。
③ タイトルの文字数は少なめに(極力ワンフレーズで→長くなると、タイトル自体が要旨となって結論が見えてしまい、読もうとする気持ちが薄れがちに)。④ 主たる読み手は保護者だが、時には間接的に教職員もターゲットに。⑤ 教職員の取組に意図的な価値づけをする(今やっていることの価値に気づかせる。自信を持たせる)。⑥ 極力、引用をしない(引用すると、その分かなりの字数が稼げますが、稚拙でも自分の言葉で伝えることを大事にしたい)。

文章を書くことが得意ではない私にとって学校だよりの巻頭言を書くことは、大げさな言い方ですが、身を削る思いをしながらの営みでした。いつも巻頭言のことが頭から離れず、書き終わっても、ホッとできるのは2〜3日で、「次は何を書くか」の繰り返しでした。余談になりますが、入浴中に、文章の修正点や新たな展開がひらめくことがけっこうありました。

苦行とも言えるものでしたが、「書くこと」と向き合うことで、その時々自分の考えが整理されたり明確になっていったりしたこと、加えて「書くこと」に対する自分なりの価値観が形成されていったことは良かったかなと思っています。